

心理的安定と学習の支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学生の頃から板書を写すことを苦手としており、授業への苦手意識も抱いていた。中学校入学時は通常どおり登校していたが、中学校1年生の5月から週1日程度休むようになった。10月からは精神的な不安を訴え欠席が更に目立つようになり、教室に入ることを拒むようになった。

具体的な取組

○別室対応による不登校生徒の支援

当該生徒が安心して登校し、過ごせるよう、校内別室における環境整備及び学習支援を行った。校内別室を利用する生徒が落ち着いて学習に臨めるよう、校内別室指導支援員や学習支援員と連携し、生徒への声かけや、座席の見直し等の助言をした。

○不登校生徒の情報収集及び校内で統一した対応

当該生徒が興味のある授業や行事等に出席できるよう、家庭へ連絡し、当該生徒への聞き取りを行った。収集した情報は学級担任や教科担任、SC等に連絡し、不登校生徒の支援体制を整えた。

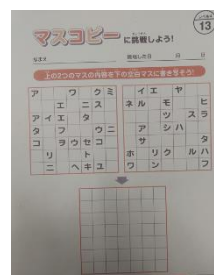
○不登校生徒や保護者への対応の強化

当該生徒の欠席が続くと定期的に電話連絡及び家庭訪問をし、面会できない場合は手紙の交換を行った。当該生徒や保護者から聞き取った情報は、学級担任やSC、SSW等と共有し、教室復帰や社会的自立に向けた支援について検討した。

○支援会議の参加と情報の活用

巡回教員が支援会議に参加し、当該生徒の特性を把握した。

当該生徒が所属する特別支援教室の担当教員と情報を共有し、マスコピーの実施など視覚発達支援を行った。



成果

当該生徒は校内別室を利用することで、登校リズムをつくることができた。学級担任や教科担任、特別支援教室の担当教員と連携することで授業への苦手意識が緩和された。1学期の出席率は約37%であったが、2学期は84%と大幅に増加した。

課題

今後も多くの教員、学校関係者と連携する。当該生徒が教室で授業を受ける機会が増えるよう支援を行う。

生徒に応じた個別支援の充実について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校 5 年生までは通常どおり登校していたが、6 年生からは人間関係の疲れやストレスが要因で欠席が目立ち始めた。集団生活に不安を抱えたまま中学校に入学し、中学校 1 年生 2 学期から欠席日数が増え、不登校になった。

具体的な取組

○校内別室の利用

コミュニケーション能力の向上と、登校のリズムを整える支援を行った。教室以外に安心して過ごせる居場所を提供した。

○個別学習の時間の設定

自学自習を基本とし、支援員が学習支援を行った。自分のペースで学習できる環境を整えた。

○特別支援教室の利用

個別指導を通して、自己の気持ちや行動をコントロールする力を高め、自己理解を深めた。

集団指導を通して、状況観察力や自己観察力、対人関係を構築する力を育てた。



○教室復帰の支援

自信のある教科や、興味のある教科の授業に出席できるよう促した。中学校 2 年生の 2 学期には、特定の教科の授業や定期テストを受けることができるようになった。

成果

中学校 1 年生の 2 学期は不定期に週 1 日程度の登校であったが、校内別室支援開始後からは登校日数が増え始め、2 年生の 1 学期からは決まった時間に毎日校内別室に登校できるようになった。特別支援教室での指導を受け、教室復帰を果たした。

課題

多くの教職員や専門職の方々が見守る体制を構築し、授業や学校行事に参加しやすい環境を整えていく。

感情表出のトレーニングによる支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学時は通常通り登校していたが、感情の表出が苦手なことから友人に合わせて行動することが増え、疲労が溜まっているようであった。仲の良い友人が不登校になったことをきっかけに、1年生2学期から登校しぶりが始まった。欠席が目立ち始めてからは生活リズムが乱れ、昼夜逆転の生活になった。

具体的な取組

○校内委員会での情報共有

当該生徒が教室以外でも安心して学校で過ごせるよう、特別支援コーディネーター、担任、部活動顧問、管理職と適宜情報共有を行った。

○部活動への参加

当該生徒は部活動への興味関心が高かったことから、顧問と連携し練習参加の機会を増やすことで登校を促した。

○特別支援教室での指導と支援

個別指導を通して、自己の気持ちを整理して友達など相手に伝えるための力を育成した。

○小集団学習の時間の設定

校内別室を利用している生徒と共にすごろくトークを行った。教員がサポートできる環境で他の生徒と関わりをもつ学習を意図的に設定した。



成果

中学校1年生までは週1日程度の登校であったが、感情表出のトレーニング開始後から週2日決まった時間に登校できるようになった。小集団で自分の気持ちを表出し、コミュニケーションを取ることができるようになり、部活動にも参加できるようになった。

課題

コミュニケーション能力の向上を図り、自信もてるように、登校機会を増やしていく。

安心して過ごせる居場所の提供と、登校リズムの定着について

不登校生徒の状況

対象生徒は、騒がしい環境を苦手としており、集団生活への不安意識が高い。中学校入学時は通常どおり登校していたが、1年生の3学期から欠席が目立ち始めた。欠席が続いたことによる学習の遅れもあり、2年生からは教室に入ることを拒み、不登校になった。

具体的な取組

○校内別室の利用

当該生徒が学校内で安心して過ごせるよう、少人数で刺激が少なく、落ち着いた雰囲気の中で過ごせる環境を提供した。

○個別学習の時間の設定

校内別室での自学自習に集中して取り組める時間を設定した。支援が必要な場面では、各教科担任や支援員が個別に対応した。



○SC との連携

集団生活への不適応から生じる精神的不安を SC との面談を通して和らげ、安心して日常生活が送れるよう対応した。

○校長、特別支援コーディネーター、学年主任、担任による面談の実施

校内別室の利用や教室復帰、授業の受け方、進路について、きめ細やかに面談を実施し、当該生徒が今後の見通しをもって生活できるよう支援した。

成果

中学校1年生の3学期は全く登校できなかったが、2年生から校内別室を利用するようになり、週2日の登校、3年生からは毎日登校できるようになった。

課題

校内別室を利用しながら、集団との適切な関わり方を学び、参加できる活動を増やしていく。

自分のペースに合わせた教室復帰プログラムづくりについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学時は通常どおり登校していたが、次第に欠席が目立つようになる。中学校2年生になって集団不安や対人不安を感じて教室へ入るのを拒むようになり、登校できなくなった。保護者は共働きで当該生徒と意思疎通ができておらず、保護者に黙って無断欠席をすることもあった。

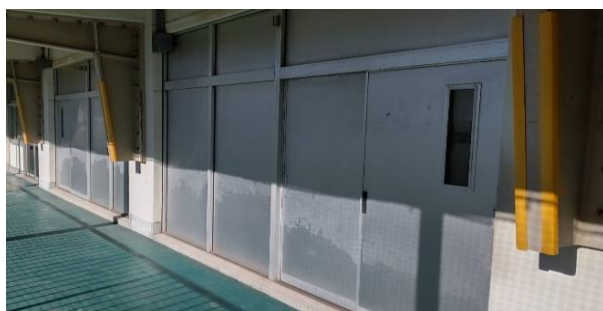
具体的な取組

○保護者との面談（1回目）

1回目の面談で生徒の不安や困り感、最終的にどうなりたいか（教室復帰を目指すのか、別室のまま学校に通い続けるのかなど）を聞き、保護者と面談を実施した。

○保護者との面談（2回目）

2回目の面談では今後どのような方針で進んでいくか、目標を達成するために必要な支援について確認を行った。



○別室登校による支援

別室登校で学校に行くことを最初の目標とした（別室は1日2時間まで利用可）。本人のペースで週1日から始め、通えるようになってから日数を増やしていくようにした。2年3学期には週4日、別室登校ができるようになった。

○特別支援教室との連携

特別支援教室では対人スキルを主に人との関わり方や自分の感情の整理などの指導を受け、次第に自信をもつようになった。特別支援教室担当教員と担任でこまめに情報共有を行い、本人の不安や悩み、できたことや頑張りたいと思っていることを共有するようにした。

成果

中学校2年生では週2日程度の登校であったが、校内別室支援開始後の3年生の4月からは、決まった時間に毎日校内別室に登校できるようになった。3年生になると通常どおり登校し、教室復帰を果たした。

課題

遅滞している学習面の支援として、放課後学習教室への参加を促し、多くの教職員や専門職の方々が見守る体制を構築していく。